

マーティン・マクドナの戯曲『枕男』^{ピロウマン} および監督映画『六連発拳銃』

河野賢司

はじめに

マーティン・マクドナ (Martin McDonagh, 1970. 3. 26-) を紹介するのは、本誌16号、26号掲載の拙論に続いて3回目である。本稿では現時点でもっとも新しい舞台劇『枕男』^{ピロウマン}と彼が初めて監督として製作した短編映画『六連発拳銃』の2作品を取り扱う。

(I) 戯曲『枕男』^{ピロウマン} (The Pillowman, 2003) 3幕

初演は2003年11月13日、ロンドンの国立劇場^{ナショナル・シアター}のコットスロウ (Cottesloe)。演出はジョン・クロウリー (John Crowley)。本作は同年のローレンス・オリビエ賞・最優秀新作賞に輝いている¹。日本での翻訳劇『ピロウマン』の初演は、2004年11月6日、東京・渋谷のパルコ劇場において、長塚圭史・演出、目黒条・翻訳で、高橋克巳 (カトゥリアン)、山崎一^{はじめ} (ミハイル)、中山祐一朗 (アリエル)、近藤芳正 (トゥポルスキ) らによって行なわれた²。

1. 『枕男』^{ピロウマン} の梗概

第1幕 第1場 4日 (月曜日) の夕方5時前、警察の取調べ室。目隠しをされたカトゥーリアン (Katurian) が舞台中央のテーブルについている。二人の刑事トゥポルスキ (Detective Tupolski) とエアリエル (Detective Ariel) が入室。トゥポルスキは目隠しを解いてやる。連行された理由が分からないカトゥーリアンにエアリエルは荒々しい態度で迫るが、上司のトゥポルスキは論理的にしかし執拗な口調で、逮捕の嫌疑は押収した彼の物語にあることを示唆する。カトゥーリアンは、「物語作家の唯一の責務は物語を語る事」という信念に基づいて仕事をしただけであり、もし政治的な内容が偶然に紛れているならば指摘箇所を削除すると申し出る。

調書確認作業において彼のフル・ネームが「カトゥーリアン・カトゥーリアン・カトゥーリアン」であることが明らかになり、トゥポルスキは呆れる。住所はカメニツェ³ (Kamenice)、知的障害のある兄マイケル⁴ (Michal) と同居し、職業は食肉処理場 (abattoir) の清掃係との説明を受けるが、トゥポルスキはその調書らしき紙を引き裂いてしまう。

続いて彼は、手元のファイルにある「リンゴの小人たち」 ('The Little Apple Men') という物

語の原稿に言及する。この話は幼い娘を虐待する父親の話で、押収された20⁵ほどの物語はいずれも親による幼児虐待を主題とするものばかりだ、とエアリエルは憤慨する。子どもが国民を(そして言外に、親が国家権力を)象徴する訳ではない、と予防線を張るかのようなカトゥーリアンの弁明に切れたエアリエルは、カトゥーリアンの髪をつかんで椅子から引きずりおろして暴行する。彼は、本当は自分の方が〈柔な刑事〉役だと矛盾する言葉を吐いて、物語の粗筋を述べる。——虐待を受けていた少女がリングを材料にして精巧な人形をいくつかこしらえ、私の思い出(memento)だから食べずにとっておいてね、と父親に頼む。しかし娘を嫌っていた大食漢の父親はその人形をすべて丸呑みし、なかに仕込まれていた剃刀の刃で喉をかき切って悶絶死する…。だが、物語はそこで終わらず、その夜、たくさんの「リング男たち」が寝ている少女の胸によじ上り、よくも弟たちを殺したな、と少女の喉元に押し入り、彼女もまた自分の血で窒息死する結末を迎える。——ちょっとした「ひねり」(twist)を加えているが、決して夢の続きではない、とカトゥーリアンは自作解説をする。

エアリエルは続いて、ユダヤ人地区に出入りしているかと彼に尋ね、学習障害学級に通う兄マイケルを迎えに行くときに通過はするが、ユダヤ人の知り合いもいなければ差別的偏見もない、とカトゥーリアンは答え、自分はただ家に引きこもって物語を書いているだけだ、と訴える。

エアリエルは、隣室にいるマイケルの取調べに行く、と退室する。カトゥーリアンはそれを聞いて愕然となり怯える。物語の件で自分が暴行を受けるのはまだしも、なんの関係もない兄が見知らぬ場所に一人で置いておかれたうえ、同様に暴行を受けるのは断じて許せない、と彼は逆上する。マイケルに手荒なまねはしないと約束してトゥポルスキは彼を宥め、別の物語「3つの絞首台のある十字路⁶の話」(‘The Tale of Three Gibbet Crossroads’)に話題を移す。途中、話の骨を折られてトゥポルスキは腹を立てるが、この話には幼児虐待の主題は薄い指摘する。カトゥーリアンはこの話は「解決策のない謎」であると答える。

トゥポルスキは以下のようにこの話の粗筋をまとめる。——ある男が鉄の絞首台に吊るされているが、罪状を彼は思い出せない。十字路には別に2つの絞首台があり、1つは「強姦犯」の標識のある檻に白骨遺体がある。もう1つには「殺人犯」の立て札があり、檻の中には死にかけの老人がいる。最初の男は自分の罪状をこの老人に読んで教えて貰おうとするが、老人は男の顔に唾を吐きかける。尼僧たちが通りかかり、「強姦犯」には祈りの言葉を、「殺人犯」には食べ物や水を施すが、最初の男の罪状を読むや、血相を変えて泣きながら立ち去る。次に追い剥ぎが現れ、殺人犯のいる檻の鍵を壊して脱走させるが、最初の男の罪名を見て微笑んだあと、彼は銃で男の胸を撃つ。男は自分の犯した罪がいったいなんなのか、知りたがり、自分は

地獄に落ちるのか、と叫ぶが、追い剥ぎは答えず、ただ静かに笑うばかりだった…。

トゥポルスキは、この話にはなにかを指し示す「ヒント」(a pointer)が隠されている、と思わせぶりに指摘するが、カトゥーリアンは自分の最高傑作は「川のある町の話」であり、これは雑誌『自由』(The Libertad^{リベルタ})に掲載され、唯一活字になった作品だと答える。彼はこの雑誌を購読はしておらず、原稿を送っただけであること、特定テーマの依頼ではなく字数制限だけが課せられたと説明する。

トゥポルスキは物語全文を起立して朗読するようにカトゥーリアンに命じる。——昔、急流の川の両岸に広がる町に、両親が酔っ払いのためにみすばらしいなり少年がいて、子どもたちから苛められていた。しかし少年は、親切で慈愛に富んでいればいつかきつと報われるものと信じて、へこたれなかった。ある晩、少年が木橋の下で休んでいると、黒頭巾に黒服の御者が運転する馬車(荷台には空っぽの檻が積まれている)がさしかかった。少年は恐怖心を追い払って、自分の夜食用のサンドウィッチを勧めた。御者はそれに応じ、少年の苦しい生い立ちなどを聞いた後、いまはその価値が分からなくともやがて有難いと思えるようなお礼の物をあげよう、と少年の目をつぶらせた。御者は内ポケットから鋭い肉切り包丁を取り出し、少年の右足から5本指を切断し、鼠どもに放り投げると、激痛で麻痺状態の少年を残してハーメルンの町を去っていった…。

カトゥーリアンは、これは有名な「ハーメルンの笛吹き男」の故事⁷に基づくもので、笛吹き男の誘導に応じられなかった足の不自由な⁸少年(the little crippled boy)の前日譚を描いたものであり、笛吹き男が(そもそも故意に)鼠を持ち込んだというのが彼の独自の説だと解説する。トゥポルスキはビスケッ缶サイズの金属箱を取り出して、カトゥーリアンの前に置き、じっと様子を窺う。

このとき、別室からマイケルと思われる男の悲鳴が聞こえてくる。約束違反を咎めるカトゥーリアンに、全体主義独裁国家の警察高官がそんな約束など守るものか、とトゥポルスキは平然と居直る。エアリエルが戻ってくるが、血だらけの手を白い布で覆っている。激昂するカトゥーリアンを焦らすかのように、トゥポルスキは「いかれた奴」(spastic)相手には素手でなく棍棒を使えとけしかけ、そしてついに「3人目の子どもはどうなった」と核心的な尋問を始める。第1の少女アンドリア(Andrea Jovacovic)の遺体は曠野^{ヒース}で発見され、第2のユダヤ人少年アロン(Aaron Goldberg)の遺体はユダヤ人地区のゴミ捨て場で発見され、これらは新聞報道されており、カトゥーリアンも記事を読んだことを認める。「第3の子ども」とは、3日前から失踪中の口のきけない少女(a little mute girl)で、これはまだ新聞発表されていない捜査中の事件である。

尋問の成り行きに当惑するカトゥーリアンは、現実社会で幼児殺人が横行しているから（それを助長するような）幼児殺人を扱う物語を書いてはならないということか、と尋ねるが、容疑はそれを上回るものであった。トゥポルスキはさきほどの金属箱を開けるようにカトゥーリアンに命じる。箱を開けた彼は中を見て恐怖で後退りし、隅で震える。エアリアルは彼の髪をつかんで椅子に座らせ、無理矢理に中を見させる。

箱の中には殺されたアロンの5本の足指が納められていて、これらはカトゥーリアンの自宅で発見されたこと、事件への関与をすでに兄のマイケルが自供していること、第1の被害者もリングに仕込まれた2枚の剃刀で致死した事実をエアリエルは突きつけ、トゥポルスキの指示に従って、切断された足指を無理矢理にカトゥーリアンの口に押し込もうとする。指示を鵜呑みにした彼に、大事な証拠品だとトゥポルスキは叱り、怒ったエアリエルはまた切れて、床に足指を放り投げて立ち去る。トゥポルスキは拾い集めて箱に戻す。

証拠物件と自供によりマイケルの死刑執行は可能だが、第3の被害者の所在が分からないので執行を猶予していると説明するトゥポルスキに、マイケルが自供したとは思えないこと、自分が書く物語や知的障害者を嫌悪する者による冤罪に違いないから、マイケルとの面会が認められるまでは黙秘する、とカトゥーリアンは断言する。トゥポルスキは、それなら電極を用意するのが一番だ、と言い残して箱を持って退出。カトゥーリアンはうなだれ、暗転。

第2場 回想場面。幼いカトゥーリアンが子ども部屋のベッドに座っている。ベッドには玩具や絵具、筆記道具。彼の語る短い物語を、ダイヤで飾られた母親と顎鬚を伸ばした眼鏡の父親が演じてみせる。——昔、両親に溺愛された少年がいて、森のお屋敷の子ども部屋は創造力を育む知的環境に満たされ、少年は創作の才能を発揮し、両親の早期英才教育実験の第1段階は成功しました（ここで両親は隣室へ移る）。しかし、7歳の誕生日の夜以降、門をかけた隣室から奇妙なドリルの機械音や押し殺した少年の悲鳴が夜毎に漏れてきて、彼は寝つけなくなる。母親に聞いても気のせいだというばかりで、少年が書く物語は両親の愛と応援のお蔭で上達はしたものの、幼児虐待の物音のせいで陰鬱さを増していった（一瞬、ベッドに縛られた8歳の子どもの姿が隣室に写る）。やがて14歳の誕生日を迎えた日、少年は物語コンテストの最終選考結果の連絡を待っていたのだが、隣室とのドア下の隙間から、赤い血で綴られたメモが差し込まれる。メモには「芸術的な実験のせいでこの7年間お前は愛されたが、ほくは苛められてきた」と書かれてあり「兄」と署名されていた。少年は斧で隣室との境の壁を打ち破る…。そこには両親だけがいる、父はドリルを持ち、母は悲鳴の声色を真似し、メモの裏側を見るように少年に言った。裏面には、少年がコンテストで1等賞金50ポンドを獲得したことが書かれ

であり、かくして実験の第2段階も成功した。

その後、一家は引越しをして悪夢のような物音は途絶え、数年後、初めての本が出版された日に、彼は久しぶりに以前住んでいた屋敷に戻ってみた。腰かけた隣室のベッドに違和感を覚えてマットレスをめくると、そこには14歳の少年のなかば白骨化した死体があり、その手には血で書かれた物語が握られていた。それを読んだ彼は、自分にはけっして書けない素晴らしい傑作だと悟って火をつけて原稿を燃やし、遺体を元通りにして、この出来事を誰にも漏らさなかった。こうして、両親の実験の最終段階も終了した。これが、カトウーリアン作「作家と作家の兄弟」(‘The Writer and the Writer’s Brother’)の結末であるが、実際には、壁を斧で突き破った少年が発見したのは、治癒不能な脳障害に苦しむ兄の姿であり、14歳の少年カトウーリアンは、寝ている父親の顔に枕を押しつけて窒息死させ、次に母親を起こして夫の死を見届けさせた後、母親にも枕を押しあてて窒息死させたのだった。のたうつ母親に少年が力づくで枕を押し当てるなか、溶暗。

第2幕 第1場 署内の独房。マイケルは椅子に座り、隣室から漏れてくるカトウーリアンの拷問の悲鳴を聞き、自分もその真似をする。彼は「緑の子豚の話」を語ろうとするが、弟のようにうまくは出来ない、と悔しがる。門が開き、血まみれになったカトウーリアンをエアリエルが放り込む。カトウーリアンは這ってマイケルの脚にしがみつくと、やがて彼は、マイケルの方はまったく拷問を受けていないことに気づく。マイケルの説明によると、演技で悲鳴をあげるように指示されたので従っただけで、自分は3人の子どもたちを殺してもいないし、字も書けないから調書に署名もしていないという。

マイケルの自供がでっち上げであれば、証拠として見せられた足指がまがい物の可能性もあり、だとすれば3人の子どもの殺人自体が事実無根のでたらめかもしれない、と物語作家カトウーリアンの推理は展開していく。いずれにせよ、どんなことがあっても、文書に署名はしないよう、カトウーリアンはマイケルに言い聞かせる。マイケルは尻の穴が痒くなったのを紛らすために、カトウーリアンに「緑の子豚」(‘The Little Green Pig’)の話聞かせてくれと頼むが、くだらないと断られ、次に「^{ピロウマン}枕男」(‘The Pillowman’)の話せがむ。

カトウーリアンは「^{ピロウマン}枕男」の話始める。——昔、身長が9フィート(=2.74m)で全身がふわふわのピンク色の枕(ただし、目はボタン、いつも大きく笑っている口の歯は白い枕)でできている男がいました。^{ピロウマン}枕男の仕事は悲しく困難なものでした。人生に苦しみ、剃刀や銃弾、ガス、飛び降りなどで自殺を図ろうとしている寸前の人々のもとへ近づき、やさしく支えて自殺を思いとどまらせるのですが、時を遡ってその人がまだ人生の苦しみを感じていない子

ども時代にタイムスリップし、まだ幸せな子どものときに自殺しておくように仕向けるのです。子どもは自殺などしない、と思われるでしょうが、^{ピロウマン}枕男は悲劇的な事故死（薬の誤飲、割れる川面の氷、駐車場での交通事故、ビニール袋による窒息など）に見せかけて自殺へと導き、両親をトラウマから救っているのです。

もちろん、^{ピロウマン}枕男の自殺の誘いに応じない子どももいます。ある少女は、自分の人生がひどいものになるとは信じられず、^{ピロウマン}枕男を追い払います。次の夜、寝室にノックがして彼女はまた追い払おうとしますが、来訪者は別人でした。この男（筆者注：おそらく父親）は、少女の母親が留守のときに決まって寝室に現れたのです。21歳になった彼女は^{ピロウマン}枕男に、なぜあのとき説得してくれなかったの、と恨み言を残してガス自殺を遂げたのです。（ここでマイケルは途中を省略して、物語の最後を語ってくれるようにせがむ。）^{ピロウマン}枕男の仕事はうまく行っても行かなくても辛いもので、一日中泣き暮れて家中が涙の池でした。そこで彼は最後の仕事にとりかかる決心を固め、石油の入った缶を持って、小川の^{しだ}垂れ柳の下に腰を降ろして待ちました。付近にはワゴン車が1台あり、「遊びに行ってくるよ、母さん」と少年の声がして、柳に近づいてきました。

しかし、現れたのは人間の少年ならぬ「^{ピロウボーイ}枕少年」(Pillowboy)で、二人は挨拶を交わしてしばらくはミニカーや犬の玩具で遊びました。^{ピロウマン}枕男が自分の仕事の苦しさを訴えるとすぐに^{ピロウボーイ}枕少年は彼の気持ちを察し、缶入り石油を自分に注ぎ、マッチで我が身に点火させました。燃えていく^{ピロウボーイ}枕少年とともに^{ピロウマン}枕男の姿も次第に薄れて行き、彼が最後に耳にしたのは、彼が自殺幫助した何万人もの子どもたちがこの世に甦り、宿命づけられた惨めな人生を歩み、^{ピロウマン}枕男の手助けもなく自ら死を選ぶ悲鳴だったのです…。

結末がよくは分からないけれど大好きな話だとマイケルは感想を述べ、しかしもう一つ理解できないことは、最初は引出しの靴下類の下に隠し、異臭がしだしてからは屋根裏のクリスマス・ツリーの鉢土に隠しておいたのに、なぜ少年の足指が発見されてしまったのだろうか、と語り始め、カトゥーリアンは血の気が引く。子どもたちを殺していないという言葉は冗談であり、悪いことだとは思ったが興味があった、と二人の子ども殺人をマイケルは告白する。——アロンは悲鳴もあげず茫然自失で座っていて、少年の体内にこれほどあるとは思えない多量の血が流れ出たこと、少女アンドリアの場合は、リンゴの人形を食べるのを嫌がったことや人形の作り方が話に出てこないのが製作に困ったことなどを淡々と語る。

カトゥーリアンから幼児殺しの目的を問いつめられたマイケルは、彼に聞かされた物語がどの程度ありそうもない（how far-fetched）内容であるかを、じっさいに確認したかっただけであり、自分は教唆されたのも同然で、犯行当時は殺す意図はなく、ただ足指を切断し剃刀を呑

ませただけだ、と弁明する。

すでに取調べで、弟が書き読み聞かせてくれた物語から幼児殺人の着想を得た、とマイケルは自供しており、自分は善良な枕男^{ピロウマン}を見習ったのだと言い張る。自分の責務を憎んでいた思慮深い枕男^{ピロウマン}はマイケルと正反対だと、カトゥーリアンは反論する。たんなる紙切れにすぎない物語のことより我々兄弟の生命の心配をした方がいい、というマイケルの言葉にかっとなったカトゥーリアンは、マイケルの頭を石の床にぶつけ、もし焼き払わねばならないなら1番にマイケル、2番目に自分自身を差し出し、物語は最後にとっておくと言い放つ。暴力を振るわれたマイケルが、まるで両親そっくりだ、とカトゥーリアンをなじると、自分たちと瓜二つに成長した兄さんの姿を見て殺された両親はさぞや誇りに思うだろうと、辛辣な皮肉をカトゥーリアンは返す。マイケルは、自分は子ども2人を殺したが、カトゥーリアンも両親2人を殺したじゃないか、と反論、長年の児童虐待の親殺しと無辜の幼児殺しとは次元が違う、とカトゥーリアンは応酬する。

3人目の少女の殺害方法を探り出そうとするカトゥーリアンに、マイケルは物語「小さなイエス」(‘The Little Jesus’)を模倣したことを暗示し、これを聞いたカトゥーリアンはさめざめと泣き始める。一方、マイケルは兄弟揃って処刑されて同じ一つ穴に埋められ、天国でも一緒にいられるだろう、と暢気^{のんき}に想像する。カトゥーリアンは、マイケルが死後に行く世界ではかつてと同じように両親から虐待を受けるが、自分はもはやそこにはいない、と冷たく応答する。沈黙に耐えられないマイケルは、盗み読みした物語「作家と作家の兄弟」が事実と反する結末だと文句をつけ、現実のようにハッピー・エンディングにすべきだと主張する。しかし、現実はどうしてもすこしも幸福ではないし、物語において遺体で発見された兄の手に握られていた珠玉の傑作「作家と作家の兄(弟)」は、実はマイケルこそが「作家」であり、カトゥーリアンはその「作家の(兄)弟」と読みとるべきなのだ、と訴える。カトゥーリアンはこうして、後世にまで残る文学作品の永続的価値を強調するあまり、作品が自分のすべてだと言い切ってしまう、マイケルは自分が除外されたのを涙まじりに抗議する。とにかく自分が死なない結末に変えてほしいと彼は訴え、意外にすんなりと諒解を得た彼は、調子に乗って、幼児殺しを煽動しかねない忌まわしい物語は焼却すべきで、煽動の恐れがないと断言できる作品は「緑の子豚」1編のみだと断言する。なぜ、よりによって「小さなイエス」を第3の犯行に用いたのかとの問いには答えず、眠気を催してきたマイケルは、天国にも眠りがあればいいが、と呟いて、死後の世界で両親に会うという嫌な発言を許してやる代わりに、「緑の子豚」の話語ってくれるようにカトゥーリアンに頼む。

カトゥーリアンは「緑の子豚」を語り始める。——昔、見知らぬ土地に他の豚たちとは違っ

た子豚がいました。ふつうのピンク色ではなく、明るい緑色、ちょうど鉄道トンネルの夜光塗料のような緑色をしていたその子豚は、他の豚たちから苛められていました。怒った農夫たちはある夜、この緑の子豚を捕まえて納屋に運び、決して剥げないし上塗りも出来ない特殊なペンキでこの豚の体をピンクに塗り替えました。他の豚たちと違っての方が幸福なのです、と神様にお祈りしても効き目はなく、この子豚は泣き疲れて眠ってしまいました。ところが、その夜、奇妙な雨雲が立ちこめて豪雨が降り注いだのですが、この雨は、決して剥げないし上塗りもきかない特殊な緑色の雨だったのです。（ここでマイケルが寝入っているのをカトゥーリアンは確認し、小声で話を続ける。）朝になって雨が止み、農場の豚たちがみな——ピンクに塗られた子豚を除いて——緑色に変色して泣き叫んでいるのを見て、この子豚は神様に感謝しました。他の豚たちと違っていたいという願いが叶えられたからです…。

カトゥーリアンは寝込んでいるマイケルに、この物語を模倣してくれれば良かったけれど兄さんの責任ではない、と涙ぐみ、枕を彼の顔に押しあてる。もがくマイケルの上半身にのしかかったまましばらく時間が経過し、マイケルは動かなくなる。カトゥーリアンは死んだマイケルの唇にキスし、瞼を閉じさせたあとで、独房のドアを叩き、ある条件と引換えに6人の殺害関与を自供する、と刑事たちに呼びかける。暗転。幕間。

第2場 カトゥーリアンが物語る「小さなイエス」の話に合わせて、少女と両親（善良な実の両親と悪い養父母の二役）が演技をする。——昔、とりわけ宗教的な嫉を受けただけでもないのに、自分は主イエス・キリストの再来であると信じ込んでいる6歳の少女がいました。少女は付け髭に草履姿で、貧者やホームレス、アル中やヤク中の人々の間を巡回し、両親から連れ戻されるたびに、地団太踏んで喚き散らし、お人形を投げつけたのです。やがて少女はまた失踪し、2日後に、ある見知らぬ司祭から、教会で戯言を説いているから至急連れ戻しにくるようにとの電話を貰ったのです。娘の無事に安堵した両親が大急ぎで車を走らせるなか、対向車の食肉トラックと激突、首がちぎれる事故死を遂げてしまいます。両親の死亡を聞いた少女は、これも主の思し召しと受けとめたので1粒だけ涙を流し、ある虐待的な養父母の住む森の家へと引き取られていきました。もちろん行政に提出された様式には虐待性や宗教（イエス）嫌いなどは申告していませんでした。日曜礼拝に行きたがる少女は、草履を取り上げられると、裸足で割れガラスの道を歩いて教会に通い、血で教会が汚れると追い出されましたし、帰宅時間が遅いとか、貧しい級友に食べ物を分けたとか、醜い子を勇気づけたり癩病患者を探したりした、といっっては殴られました。苦難続きの人生を笑顔で耐えていた少女は、ある日、路傍で物乞いをする盲人に遭いました。（この盲人役はナレーターのカトゥーリアンが演じる。）彼女

は土に自分の唾を混ぜて、盲人の^{こす}顔を擦りました。盲人は警察に被害を訴え、駆けつけた養父母から「イエスの真似がしたい訳だな」と訊かれた少女は「やっと、分かったんだね」と答え、この時から不幸が始まります。

養母は鉄条網でできた荊の冠を少女にかぶせ、養父は9本ひもの鞭（a cat o' nine tails）で気絶するまでぶちのめし、重い木の十字架を背負わせてふらふらになるまで居間を歩きまわらせ、さらには十字架に両手両足を釘で打ちつけてそのまま壁に立てかけて放置し、めぼしいテレビ番組も終わる頃、「まだイエスのようになりたいか」と、槍を研ぎながら養父母は尋ねたのです。少女が「なりたくはありません。私がイエスその人なのです」と答えるや、脇腹に槍を突き刺したまま、二人は就寝したのです。翌朝、養父母が戻ってみると、少女はまだ生きていて、十字架から降ろされると、許しを与えるかのように養父母の顔に触れさえしました。養父母はガラスの棺（3日間だけ生きられる空気量）に少女を納めて蓋をして土をかけて生き埋めにし、イエスなら3日後に復活するだろうな、と声をかけました。地中の少女はその通りだと微笑み、ひたすら待ち続けました。（棺の中の少女は爪で蓋を引っ掻く。カトゥーリアンが棺に近づく。）3日後、森を通りかかった男がこの墓に躓きますが、彼は盲人でそのまま通り過ぎ、爪の立てる音にも気づかず、やがてその微かな音も森の暗い、暗い闇のなかに消えて行きました…。暗転。

第3幕 第1幕と同じ取調べ室。カトゥーリアンは供述書にペンを走らせ、書きあげた頁をトゥポルスキに手渡し、彼が読み上げる。供述によれば、6人の殺害に関与し、うち3人は単独犯行、3人は添付資料の忌まわしい物語に影響された兄と自分による共同犯行であり、もっとも最近の犯行は兄マイケル殺しである。第3の少女殺害に触れる箇所はまだ筆記中のため、エアリエルは肩越しに供述書を読み、「小さなイエス」に基づく犯行だと知って、その物語を読み始める。すでに通読していたトゥポルスキは、少女の生き埋め場所を問い質し、自宅から程近い泉の傍であり、他に2人の大人も埋められていることを聞き出す。読むのが遅いエアリアルに、埋葬場所を知るには結末を読めばいいはずだと急かして、トゥポルスキは科学捜査班の出動要請に退出する。読了したエアリエルは忌まわしい物語への嫌悪感を示し、供述書の2枚目を読み上げる。（第1、第2の被害者の子どもをカトゥーリアンは押さえつける役割を果たしたと、マイケルを擁護する趣旨が書かれている。）カトゥーリアンはこの全面自供と交換条件に、自作の物語を彼の死後50年間は事件ファイルとして秘密保存するという取り決めを結んでいる。両親殺しの記述に取りかかったカトゥーリアンは、なぜ両親を殺したのかとエアリエルに訊かれて、自伝的傾向の強い「作家と作家の兄弟」にある通り、両親による兄の虐待が

原因だと説明する。そうした事情は、即刻処刑とならずに法廷審理になれば情状酌量の効果があるが、とエアリエルは語りだし、自分は幼児虐待の連中を徹底的に憎悪しており、老いたときには子どもがお菓子をくれるほど、子どもの側に立って正義を代表する潔癖症の人間として、幼児殺害の実行犯はもちろんのこと、幼児殺害をテーマとする物語を書く輩は断じて許せない、といきり立って、電極がついた大型バッテリーを戸棚から持ち出してくる。

トゥポルスキが戻る。彼はこの威嚇行為を止めるどころか、始めていなかったことを咎め、例の「老いたときには子どもがお菓子をくれる」の雑談にかまけていたのか、と凶星を指す。エアリアルは悪態をつき、電気ショックを与えるべく、カトゥーリアンに跪くように命じる。カトゥーリアンは鋭い直感で、エアリエルが彼の父親から同様に暴行を受けていたのだろうと見事に推測し、二人の刑事は狼狽する。エアリエルはトゥポルスキの「問題ある幼児期」という表現が推測のヒントになったと非難し、カトゥーリアンは、行動を正当化するためになんでもかんでも幼児期のせいにするのはうんざりで、自分がアル中なのは父親がアル中だったからではなく、個人的にアル中の道を選んだのだ、と反論する。

エアリエルは拷問のための配線作業に取りかかるが、なぜ、虐待を働いた彼の父親は監獄にも入れられず逮捕もされないのか、とのカトゥーリアンの問いに、エアリエルによって殺害されたからだ、とトゥポルスキは暴露し、8歳の頃からベッドに忍び込んできた、いかがわしい父親を枕で窒息死させた点では、エアリエルとカトゥーリアンは大いに似た者同士だ、とまで言い放つ。

エアリエルは今回の尋問過程の不明快さを、昵懇の司令官に直訴し、自分を主査に昇格して貰うつもりだと反抗するが、トゥポルスキは、愚問で動揺を誘うのは取調べの常套手段であり、自分なら拷問作業をやめて実際的な尋問を続けるとして、生き埋めにした時点で第3の少女は生きていたか、死んでいたか、と問い質す。分からない、とのカトゥーリアンの返答を受けて、〈生存の見込みあり〉と発掘捜索隊に連絡するように、エアリエルに命じる。カトゥーリアンのあやふやな返答と、生き埋め物語の模倣だとすれば生存の可能性がある、とトゥポルスキは判断したのである。

トゥポルスキは自分も実は、物語を書いた経験があり、世界観というよりも——「世界は糞の山」だから——刑事の職業観と世間一般と刑事職との関係を扱ったもので、タイトルの「長大な鉄道線路上にいる耳の聞こえない少年の話。中国における」(‘The Story of the Little Deaf Boy on the Big Long Railroad Tracks. In China’)の感想を求められたカトゥーリアンは、タイトルに句点が入るのは、時代を先取りしすぎたともいえるが、とても妙だ、と異論を唱える。

トゥポルスキはこの話を語り始める。——昔、まったく耳の聞こえない中国人の少年がいて、

鉄道線路に沿って大平原を歩いていました。全聾ですから背後から列車が迫れば危険な訳ですが、知的障害があったのかもしれませんが。実際、列車は彼の背後から猛スピードで接近中だったのですが、小柄で短髪の少年の姿に運転士は気づいていませんでした。

しかしながら、少年の進行方向1マイル先にある、高さ30^{フィート}ほどの古い塔に住む老人——斜視で、長い口髭と奇妙な帽子の老人——の目には少年の姿は映っていました。老人は考えます、少年は耳が聞こえないからやがて列車にはねられてしまう、と。(ここでカトゥーリアンは、なぜ聾者だと分かるのか、と鋭い疑問を投げるが、補聴器が見えたからだ、とトゥポルスキは少し考えてから答え、納得を得る。) 飛び出して止めに行っても間に合わないと判断した老人は、列車の速度と線路の長さ、少年の歩行速度に基づいて、どの地点で少年が列車にはねられるかの計算に取りかかり、塔から10ヤード(約9^{フィート})の地点という解答を得ました。老人は退屈して計算用紙で紙飛行機を折って窓から飛ばし、また仕事に戻り、少年のことなどもう気にもとめませんでした。(間。) 塔から11ヤードの地点で少年は紙飛行機をつかまえようとして線路から飛び降りました。その直後に列車が背後から駆け抜けました…。

カトゥーリアンはこの話を褒めるが、どのように刑事の職業観と関わるのか、と尋ねる。トゥポルスキの答えは明瞭で、老人は彼自身、全聾少年は相棒を象徴し、自分は正確な計算と臨機応変の対応によって相棒の窮地を救ってやるが、感謝の言葉ひとつ貰えない。それでもこうして孜孜として職務に励んでいる、と解説する。カトゥーリアンは、紙飛行機を飛ばしたのは少年を助ける意図があったからなのか、老人がすぐに仕事に戻ってしまったはその点が曖昧だ、と指摘する。トゥポルスキはこの指摘を考慮するが、立場が逆だと気づいて腹を立て、カトゥーリアンの物語原稿とマッチをつかんで、焼却処分するぞと威嚇する。懸命にトゥポルスキの機嫌をとるお世辞を並べた甲斐があって、彼はマッチを離し、和解する。

20分後にはカトゥーリアンを銃殺せねばならないトゥポルスキは、物語「枕男^{ピロウマン}」には事故死する子どもがひとりぼっちで死ぬわけではない、という優しさが込められていて、駄作ではない、と評価する。お子さんを亡くされましたか、とのカトゥーリアンの直感的な問いに、一人で釣りに行った息子が溺死した、とトゥポルスキは言葉少なに打ち明ける。続いて彼は、処刑の手順を説明し、別室で黒頭巾をかぶらせた後およそ10秒後に頭部を銃撃すると知らせる。

エアリエルが呆然として戻り、カトゥーリアンの髪をつかんで揺すぶり、睨みつける。第3の少女は遺体で発見されたか、とのトゥポルスキの問いを彼は否定し、全身を明るい緑色に塗った8歳くらいの少女マリア(Maria)を部屋に招き入れ、彼女は手話で挨拶する。マリアは泉の近くの「こどもの家」(Wendy house)で3匹の子豚と楽しく過ごしていて、その子豚を家に連れて帰りたい、と願い出て、それが認められると喜んで跳ね回り、エアリエルに付き添われ

て退出する。

すぐまた戻ってきたエアリエルは、2体の遺骨はたしかに発掘されたが、第3の少女殺しは実行されていないことを報告する。緑のペンキと子豚の状況証拠から、「緑の子豚」に基づいた犯行だったことは明らかだが、なぜ殺害しなかったのか、またなぜ殺害したと嘘をついたのか、とエアリエルはカトウーリアンに尋ねるが、もちろん彼にも答えられない。閃きを得たエアリエルは、第2の被害者少年の髪の色を問い質す。ユダヤ人にありがちな「黒褐色」とのカトウーリアンの返答は、アイルランド人の母親譲りの赤毛だった少年の本当の髪の色を当てることはできず、やむなく彼は、両親殺害は自分の犯行だが、幼児連続殺害には関与していないことを認める。

事態の急変に混乱していたトゥポルスキは、ともかく真相究明にこぎつけたことでエアリエルを褒め、なぜ無実の幼児殺しの犯行を自供したのか、カトウーリアンに尋ね、自分の物語の原稿を守るためだった、と彼は答える。しかし、トゥポルスキは、全面自供に虚偽が含まれていた以上、交換条件は履行できないとして、ゴミ箱の中で原稿を燃やす準備をする。カトウーリアンはエアリエルに救いを求めるが、論理的に正しいトゥポルスキの説明に異議を挟むことはできない。彼もまた、情状は斟酌できるし、気の毒だとは思いますが、カトウーリアンが創作した物語への嫌悪感は変わらない、と突き放す。

当初説明した処刑手順は反故にされ、カトウーリアンの銃殺はこの部屋で行うことになる。自分はすぐれた作家だった、という彼の回想の過去形は「きわめて適切な言葉」(the operative word)だと、トゥポルスキは評する。そして頭巾をかぶってから約束の10秒を待たない4秒前にトゥポルスキはいきなり発砲し、カトウーリアンは血を流して即死する。約束違反を指摘されたトゥポルスキは、このほうがほんとうはいいのだと釈明し、書類作成と床掃除、そして物語の焼却を命じて、退出する。

ゴミ箱の火に軽油を加え、原稿の束を手にするエアリエルに、たったいま殺されたカトウーリアンが立ち上がって頭巾を脱ぎ、話しかける。——死の直前7秒あまりの間に、物語の脚注のような短い話を思いついた。両親の虐待が始まる前の晩、マイケル・カトウーリアンは枕^{ピロウ}男^{マン}の来訪を受け、待ち受けているおぞましい未来を生きるよりも、いつそいま自殺を選んではどうかと提案された。マイケル(彼は戸口に現れている)は、でもそうすれば、僕が虐待を受ける悲鳴が聞こえず、弟は物語を作ることが出来なくなるね、と確認し、弟の作品が大好きだから、このままでいいや、と答える。

物語がすべて焼却される終わり方を迎えつつあったのだけれど、どういう訳だか、エアリエルは焼却処分をせずに、原稿を事件ファイルに収めて50余年に渡る間、封印した。現代風の陰

鬱な結末ではないかもしれないが、ことの真意にはかなっているものだった、とカトゥーリアンは結び、エアリエルが水で火を消すと、照明が次第に溶暗する。了。

2. 若干の解説

(1) 殺人と暴力の主題

以上の梗概から分かるように、これまでのマクドナ作品の特徴がこの戯曲にも顕著に現れている。まず、殺人や暴力の主題である。2人の子どもの猟奇的殺害は登場人物によって語られるだけだが、両親とマイケルは舞台上で枕を押し当てられて窒息死し、カトゥーリアンは至近距離から銃殺される。すなわち、さまざまな殺人形態（親族殺人、幼児殺人、国家権力による処刑）がこの劇においても扱われている。さらには、暴力の伝染性の問題もある。マイケルが、暴力的刺激の強い物語に影響されてフィクションを実行に移してしまったように、判断力が低下した人々や状況下では、虚構と現実の区別を忘れさせるほどに、暴力への無意識的衝動を喚起してしまう潜在力を、メディアは持っていることが示されている。

(2) 物語論

さらに、理論と事例つきの「物語論」としての側面もこの劇にはある。第1幕でカトゥーリアンが疑心暗鬼に陥るように、物語に書かれてあることをそのまま真実だと受けとめてはならない、とマクドナは主張している。真実がどこにあるのかは、じっさいには分からないことが多く、誰かがなにかをした、という発言は、その発言の事実はたしかでも一あるいはそれすらも怪しくなるのだが—発言内容がほんとうに正しいかどうかは担保できない。場合によっては、信頼を暗黙の前提におくべきナレーターの言葉すら疑ってかからねばならないのが、物語解釈の手ごわいところである。一方、他の作品にも見られるような、終盤での展開の驚くべきひねりの妙味、創作活動の所産としての文学作品の永遠性への希望などは、作家マクドナの技量や信念に基づくものであろう。

ただ、これまではアイルランド農村部を舞台としてきたのに対し、この作品では匿名の全体主義独裁国家が設定されている。登場人物の名前から推察すると、ロシアや東欧を念頭においているようだが、まったく架空の国家かも知れない。これによって作品の普遍性を高めているが、アイルランドにも歴史的検閲やカトリック教会の絶対的支配の問題があるはずで、他の作品同様にアイルランドに舞台設定することもじゅうぶん可能だったように思われる。

(3) 映画『クローゼット・ランド』の影響

マクドナが参考にしたかどうかは分からないが、この戯曲の第1幕の雰囲気はアメリカ映画『クローゼット・ランド』(Closet Land, 1991)との共通点が多い。『バジル』(Basil, 1997)で

も知られるインド系英国人女性ラダ・バラドワジ (Radha Bharadwaji) の脚本・監督作品『クローゼット・ランド』は、密室での訊問・取調べ劇である。深夜に連行され、目隠しや手錠をさせられた容疑者が、若い女性 (演じるのはマデリーン・ストウ [Madeleine Stowe]) である点は異なるが、職業が絵本作家であり、彼女の絵本『クローゼット・ランド』に反体制的な意図が隠されているとして、取調官 (演じるのはアラン・リックマン [Alan Rickman]) がときには声色を使い分けて別人になりすまし、黒い下着姿にさせ、足の爪をはぐなどの拷問を加えながら、供述調書に署名を迫る、という展開をとっている。

マクドナの『枕男』における物語作家カトウーリアンの受けた嫌疑は、じっさいには劇の冒頭で暗示されたような反体制思想ではなく、連続幼児殺害という刑事事件であったが、どちらも、子ども向けの図書に体制転覆のメッセージが託される可能性があることを暗示する点では似通っている。また、『クローゼット・ランド』の主人公の女性が、幼児期にクローゼットのなかで母親の友人から性的悪戯をされた—そしてほかならぬこの取調官がその犯人であるとも示唆される—とする設定は、幼児虐待のヴァリエーションとしてマクドナの芝居の主題に一部重なり合うものがある。なによりも、アイルランド現代史を扱う『マイケル・コリンズ』 (Michael Collins, 1996) でデ・ヴァレラ役を演じたアラン・リックマンの主演作品であるから、映画通のアイルランド人・マクドナが観ている可能性は高いはずである。

(4) いくつかの解けない謎

この戯曲において筆者の腑に落ちない点をいくつか指摘してみたい。まず、マイケルは第3の少女を「小さなイエス」に倣った生き埋めにはせず、「緑の子豚」に倣って緑色に染めた訳だが、なぜカトウーリアンに対して、犯行モデルは「小さなイエス」だと嘘をついた (56) のだろうか。「小さなイエス」とタイトルを切り出す前に、2度ほどためらいの句点がテキストにある。余りに残酷な物語でマイケル自身が恥ずかしくて告白をためらったのかと (そこまでの展開からは) 思えるが、事実と反する発言である以上、これはむしろ嘘を思いつくための間^まだったと考えるしかない。では、なぜ嘘をついたのか。2つの殺人を犯した彼が、自分を責めるカトウーリアンをわざと困らせるために、からかい半分にあえて「小さなイエス」を持ち出したのか。また、なぜ第3の少女にだけは無害な物語「緑の子豚」を適用したのか。劇でも言及される「ハーメルンの笛吹き男」にヒントを求めるならば、この少女が「唾者」であったから殺害の難を逃れたのかも知れない。マイケルの犯行を他者に口外する恐れがない以上、彼女を殺す必要も生じないからである。(実際には彼女は手話が達者で、喧伝されてしまう可能性はあるが。) しかし、これはあくまで推論にすぎず、明確な答えを筆者はさがしだせないでいる。

マイケルとカトゥーリアンの兄弟関係は、第1幕第2場の最後で語られているように、14歳のカトゥーリアンが、別室に幽閉され拷問を受けていた兄マイケルを発見する筋書きになっている。はっきりしないのは、長男マイケルへの両親の虐待がその7年前に始まっていることで、マイケルの知的障害がこの頃から自然に発現したのか、あるいは両親の虐待によって知的障害が引き起こされたのか、それとも、もっと幼い頃からマイケルにその生得的傾向があったのか、といった点である。テキストを読む限りでは、カトゥーリアンは自分に兄がいることを知らなのまま成長している書き方がされている。もしそのとおりならば、兄弟の初対面はカトゥーリアンが14歳のときまで先送りされることになり、この予想外の事態との直面からいきなり両親の殺人へと向かう論理的必然性が見えてこない。生まれてまもなくマイケルが隔離されて養育され、カトゥーリアンとの接触を断絶されていたのならば、劇で描かれているような兄弟の親密な情愛が育まれるには、もう少し時間が必要とされたように感じる。両親からの事情説明も聞かないで、いきなり就寝中に襲う行為は筆者には理解しがたい。

第1幕で語られる「3つの絞首台のある十字路の話」の射殺される男の罪状も種明かしがされていない。強姦や殺人よりも唾棄すべき凶悪な行為とはなんだろうか。この戯曲全体の趣旨に照らせば、「幼児殺し」あるいは「近親相姦」、あるいはなんらかの形での「神への冒瀆行為」が想像される。前者は「殺人」「強姦」の範疇に属し、内容的に重複することが気になるし、後者は漠然としていて、なにかに特定するのが困難である。聞き手の自由な想像に任せるといのがマクドナの狙いなのだろうか。

絞首台とは違うが、磔刑の十字架3本ということなら、聖書におけるイエス・キリストの処刑描写になる。イエスの両隣りで磔刑となった男たちは「2人の強盗（泥棒）」であって、強姦や殺人を犯した訳ではないが、「イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げ」（『マタイによる福音書』27章37節）ていて、イエスの目には触れない高い位置にあった。もし、この聖書の記述をマクドナが意識しているのならば、男はイエスあるいはイエスと名乗る者で、罪状は「大逆罪」あるいは「僭称罪」かもしれない。

(5) 『枕男』^{ピロウマン}の物語の主題

戯曲の標題にもとられた『枕男』^{ピロウマン}の話は、哀しい運命論的な味わい深さとともに、必ずしもすんなりと受け入れられない要素を含んでいる。惨めな人生を歩んできた自殺直前の人々に自殺を思い止まらせる代わりに、枕男は時の流れを遡って、まだ人生が幸福な時期のその人々に会って、その時点での早期自殺を勧める。その合理的発想は、人生の負の部分・影の時代を帳消しにして、喜悦のうちに人生を終了させる意味においては、一種の「安楽死殺人」ともいえる。だがそれは、苦痛に満ちた生は生きるに値しないという、短絡的に割り切った悲観的な

人生観の押しつけでもある。どんなに苦しくとも惨めでも、やはり人は生きられるうちは生きていかなければならない、と筆者は思う。自分の任務の一環として、^{ピロウマン}枕男自身が自分の人生を終わらせねばならなくなると、慈悲にみちた善行のつもりで彼がおこなってきた運命操作はすべてリセット状態に戻り、世界は夥しい人々の苦悩の叫びで満ちあふれる。けっきょく、彼の行為は水泡に帰するのである。

両親殺し、兄殺しの凶器に「枕」が使われている点も注意が必要だろう。鋭利な刃物のように血飛沫^{しぶき}はあがらないだろうが、呼吸困難の苦しみに両親や兄は、もがき、のたうつ。どんなにふわふわの柔らかい素材の枕であろうと、断末魔の苦しみに変わりはない。それはまさしく「真綿で首を締める」に等しい苦痛である。柔らかな「枕」だから死の苦しみが和らぐというものではけっしてない。

(Ⅱ) 監督作品映画『六連発拳銃』(Six Shooter, 2004)

続いて取り上げる『六連発拳銃』(Six Shooter, 2004)は、マクドナの映画初監督・脚本作品であるが、脚本自体はすでに公開の8年も前に出来上がっていたらしい。つまり、彼の劇作家としてのデビュー作『リーナン村のミス・コン女王』(The Beauty Queen of Leenane, 1996)とほぼ同じ時期に執筆されていた訳である。親殺し・動物虐待・法螺話など、陰惨と笑いが同居するマクドナ演劇の主題や特色が凝縮されている短篇映画(26分⁹)であり、2006年3月5日には同年度アカデミー賞最優秀実写(ライブ・アクション)短篇作品賞(Academy Award for Live Action Short Film)をはじめ、いくつかの映画賞¹⁰を獲得している。

1. 映画の粗筋

アイルランドのある土地¹¹で、最愛の妻が未明に息を引き取ったことを中年紳士ドネリー氏(Mr. Donnelly; by Brendan Gleeson)が病室で告げられる場面からこの映画は始まる。担当医師は哀悼の挨拶もそこそこに立ち去る。この日は、乳幼児突然死(cot death)2件に加えて、息子が母親の頭部を銃撃・損壊する凶悪殺人事件もあり、対応に奔走しているためである。ドネリー氏は妻に口づけし、ペットの白ウサギ、デイヴィッド(David)の写真を亡骸に捧げる。

同じ日の遅い午前、ダブリン方面に向かう列車に乗り込んだドネリー氏は、奇妙な少年(Kid; by Rualdhri Conroy, 1979-)——ゴリラのおもちゃをテーブル¹²に置いている——の向かい席に腰を降ろす。少年は、いわゆる4文字言葉を頻繁に交える乱暴な言葉使いで、大きくなれば何にでもなれると母親から聞かされたけれど身長が高いと競馬騎手^{ジョッキニー}になれない¹³とか、馬場馬術^{ドレサージュ}¹⁴(dressage)という用語も気に入らねえ、と大声で喋りまくり、乗り合わせた他の乗客——昨

夜、乳幼児突然死で幼子を亡くし悲嘆に暮れているドゥリー（Dooley）夫妻——の輦蹙と反感を買っている。しかし、少年はいっこうに意に介さず、実際は親の虐待¹⁵で赤ん坊を死なせたのじゃないかと邪推し、ドネリー氏にも、将来もう子どもを作らないのか¹⁶、と不躰な質問を浴びせる。単語の連発に我慢ならなくなったドゥリーは少年をどやしつけ、同じように苛立ちを覚えたドネリー氏も、車内巡回をサボっている若い販売員にデッキで喰ってかかり、販売時間外の酒を無理に売らせる。ドゥリーもデッキで一服吹かし、少年はきっと知恵遅れだが害はないだろう、などとドネリー氏と意見交換する。

一方、その間に少年は、死んだ赤ん坊の写真をじっと見つめるドゥリー夫人の隣の席に押しかけ、みっともない容貌¹⁷の赤ん坊だ、と悪口を言う。席を移ろうとした夫人はつまずいて転倒し、その拍子に愛児の写真を破ってしまい、憤然とデッキへと向かう。やがて、もとの席に戻った少年の窓ガラスに激しい衝突物があり、急いで少年がデッキへ向かうと、列車のドアが大きく開いていて、破れた写真が床に落ちていた…。明らかに夫人が衝動的に進行列車から飛び降り自殺を図ったらしい。

戻ってきた夫は少年の報告を信じないが、窓ガラスに付着した血痕にふと気づいたドネリー氏は、緊急停車用のプラグを引っ張る。駆けつけた警察による現場検証や事情聴取——少年の顔に見覚えがあるが、警官は誰だか思い出せない——が終わり、ふたたび発車する列車から陽気に手を振る少年の顔にようやくピンときた別の警官は、次の駅に武装警官の緊急配備を指示する。

走り出した車内で、少年は夕べ自分の母親が殺されたのが嬉しくてたまらない、と語りだし、妻に死なせたドネリー氏が泣き出すのに対して、奥さんは神様のもとにいるよ、と慰めの言葉をかける。やがて、少年は十八番^{おはこ}と思われる「鼓腸症の牝牛」（the cow with trapped wind）のジョークを、上着を脱いで愉快そうに話し出す。——7歳のころ、父親と牛市で見かけた牝牛が鼓腸症で風船のように膨張していると、通りがかりの小男がなんとネジ回しで牛の脇腹を突き刺してガス抜きをして、もとの体形に戻す妙技を見せた。そればかりか、このガスは家庭用ガスと同じ種類だと言ってみごとに点火させたので、周囲の人々は拍手喝采。しかし、炎は牝牛の体内ガスにも引火し、大爆発。空中高く赤い牛肉片が飛び散る惨状となり、小男は一目散に逃げだした、という眉唾物の法螺話である。

やがて、下車駅が近づいたドネリー氏に少年は、奥さんの死は気の毒だ、と声をかける。君の母親の死も残念だと返すドネリー氏に、少年は「ちっとも」（No loss.）と答える。デッキに立ったドネリー氏は、線路沿いで銃撃態勢をとる武装警官たちの存在に気がつき、ここにいたってようやく少年の正体に思い当たる。少年は伸ばした両手に六連発¹⁸拳銃2丁を握り締め、車

外の警官隊と激しい銃撃戦を始めるが、無防備に突っ立った姿勢の彼は、胸に何発もの銃弾を浴びて倒れ、自分の銃撃は一発も当たらなかったことが「すげえ情けねえよ」(fucking woeful)と繰り返し嘆いて、絶命する。少年を抱きかかえたドネリー氏は、彼の拳銃1丁を自分のポケットにこっそりと忍ばせる。

場面変わって、ドネリー氏の自宅居間。奪った拳銃で妻の後追い自殺を図るべくこめかみに銃口をあてたものの、折悪しく、飼うウサギのデイヴィッドが姿を見せ、先にこのペットの頭部を吹っ飛ばして、残った最後の一発で自分も死のうとする。ところが、あにはからんや、途中で銃はあえなく暴発し、自殺手段を失ったドネリー氏は「なんてひでえ日だ」(What a fucking day.)と呟くしかない。

2. 寸評

妻に死なれた男、赤ん坊に死なれた夫婦、母親を殺した少年が、同じ車両に乗り合わせる恐ろしい偶然の一致。最愛の家族を失って悲嘆に暮れる人々と、母親を殺して意気揚揚としている少年の対比。殺人を犯していながら、妙に屈託のない明るさで平然と振るまい、ときにはお茶をおごり、優しい慰めの言葉もかける少年の、とらえどころのない複雑な性格。アイルランドののどかな田園地帯を横切って単調に進行する列車のなかで、それぞれに苦悩や葛藤を抱えた人物たちが偶然の巡り合いをし、人生の大きな転換を余儀なくされてしまう運命の不条理。実によく練られた構成と現実感のある演技陣で、何度、視返してもあらたな発見がある秀作短篇である。

マクドナの他の演劇作品同様に、死の匂いがこの短篇映画にも満ち満ちている。3人の人間(病死のドネリー夫人、自殺のドゥリー夫人、射殺される少年)が死に、2人の人間(少年の母、ドゥリー夫妻の赤ん坊)の死が言及され、動物では牛とウサギが殺され、都合7つの生命が奪われている。あとに残されたのは、どちらも妻に先立たれた哀れな中年男2人だけ。どこまでもシニカル、かつブラックなマクドナ作品の典型である。

3. キャストについて

憂愁の陰が漂う男 ^{やもめ} 寡ドネリー氏を演じたグリーンソンは、『ギャング・オブ・ニューヨーク』(Gangs of New York, 2002)や『ジェネラル 天国は血の匂い』(The General, 1998)でもお馴染みの、恰幅のいい名優。サイコ的な少年役を演じたコンロイは『白馬の伝説』(Into the West, 1993)の子役としても好演している。

映画脚本は未入手のため、登場人物の設定が不明であるが、俳優の実年齢で類推すると、1979

年生まれのコンロイ演じる少年は、映画出演時は25歳。人懐っこい童顔であるから分かりにくいですが、じっさいにはもう少年とは呼べない年齢での出演。しかし、DVDではどうみても彼は十代後半の少年にしか見えない。

さいごに

筆者の怠慢で、詳しい作品分析や解説ができていない憾みはあるが、ひとまずマクドナ論の増補編として拙論を執筆・提出した次第である。まだまだ今後の活躍が期待されるこの劇作家についてこれからも紹介を試みたい。

テキスト

Martin McDonagh, *The Pillowman* (London: Faber and Faber, 2003).

註

- 1 藤谷浩二「オリビエ賞にみる英国演劇」(『朝日新聞』2004年3月11日、23面)によれば、「切断された子どもの指、拷問、暴力。目を背けたくなる光景の連続だが、せりふに込められたユーモアや俳優たちの確かな演技がコメディに昇華させることに成功。オブザーバー紙は「胃がむかつくが、ものすごくおかしい」と評した」という。
- 2 筆者が観劇したのは、11月29日のメルパルクホール FUKUOKA での公演。16列目でほぼ客席中央・左端だったが、広い会場では役者の台詞が聞きとりづらく、この芝居はやはり小さな劇場で上演すべき作品だと感じた。
- 3 ポヘミア南部(チェコ)に同名の地名がある。
- 4 目黒条訳では東欧風に「ミハイル」。辞書ではこの綴り字の英語発音は「マイクル」「マイカル」あたりのようだが、一般的な「マイケル」をあてておいた。
- 5 全部で400ほどの物語をカトゥーリアンは書いている。
- 6 イギリスのコヴェントリー(Coventry)のジベット・ヒル(Gibbet Hill)には、3人が絞首台にかけられた故事がある。1765年、トマス・エドワーズ(Thomas Edwards)殺害のかどでベイカー(Moses Baker)、ドゥルルーリー(Edward Drury)、レズリー(Robert Leslie)の3人が死刑を宣告され、従容と刑の執行を受けた。彼らの遺体はそののちタール加工されて1810年までの45年間ほどこの十字路に吊るされ続けたのだという。<http://www.thecoventrypages.net/historic-cov/Gibbet-hill.asp> (2007年10月9日取得)
- 7 1284年6月26日、鼠退治の報酬が支払われなかったことに激怒した男が、笛の音色でハーメルンに住む130人の子どもたちを誘導して山の洞窟に入り、忽然と姿を消したという民間伝承で、グリム兄弟ほかの作者によって伝えられている。
- 8 「盲目と唾の二人の子供」や「シャツのままとび出したので、上衣を取りに戻った」少年が難を逃れたとか、足が不自由で他の子どもより遅れた2人の子どもが助かったとするヴァージョンもあるらしい。(阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』, 平凡社, 1974/83年), pp.15-16.) エンデ(Michael Ende, 1929-95)の創作劇『ハーメルンの死の舞踏』でも、「足萎えの少女を背負った、盲目の少年」の2人組が助かり、子どもたちが連れて行かれる状況を報告する役目を劇中で果たしている。(『エンデ全集10』, 岩波書店, 1997年, p.192.)

- ⁹ 27分とする資料も多いが、ここではDVDの記載に従う。
- ¹⁰ 2004年にはコーク国際映画祭でのアイルランド人監督最優秀初短篇賞 (Best First Short by an Irish Director) とフォイル (Foyle) 映画祭での最優秀アイルランド短篇賞 (Best Irish Short) を、2005年には英国映画テレビ芸術アカデミー (BAFTA: British Academy of Film and Television Arts) 映画賞の最優秀短編映画候補にノミネートされて最優秀英国短篇インデペンデント映画賞 (Best Short Film British Independent Film Award) および IFTA 最優秀短篇作品賞 (IFTA Award as Best Short Fiction), 2006年にはベルギーのルヴァン (Leuven) 国際短篇映画祭での観客賞 (Audience Award) を受賞している。
[http://en.wikipedia.org/wiki/Six_Shooter_\(film\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Six_Shooter_(film)) 2007年9月19日取得。
- ¹¹ マクドナに関する本格的研究書の一つ, Lilian Chambers and Eamonn Jordan (eds.), *The Theatre of Martin McDonagh: A World of Savage Stories* (Dublin: Carysfort Press, 2006) においても、具体的な地名は明らかにされていない、としている (p.2.)。ただし、ウェブ情報ではロケ地を南東部のウィックロウ州としている。
- ¹² アイルランド鉄道の車両には、広いテーブルが座席に設置されていて、食事や読書に快適である。
- ¹³ この指摘に対してドネリー氏は、(タイムを争わない) 障害飛越競技 (show jump) の騎手にならなれるかも、と応じるが、少年は呆れたようにこの言葉 (show jump) を繰り返す。
- ¹⁴ 騎手はほとんど体を動かさずに馬に複雑な演技をさせること。
- ¹⁵ 少年はドゥリー夫妻を「フレッドとローズマリー」(Fred and Rosemary) と呼んでいる。1992年8月、英国グロウスター州に住むウェスト夫妻 (フレデリックとローズマリー) は未成年者強姦容疑で逮捕されたが、証拠不十分で不起訴処分となった。しかしその後、夫婦の娘も含む、少なくとも12人の少女を虐待して殺害し、自宅の庭に埋めたとされている。少年は、赤ん坊の死は夫妻の虐待によるものと決めつけ、この連続少女殺害犯夫婦になぞらえたのである。
- ¹⁶ 老いてなお盛ん、の例としてこのとき少年が挙げたのが、5人の妻を娶ったアメリカ人俳優ロッド・スタイガー (Rod Steiger, 1925-2002) で、「100歳で子どもを拵えた」と誇張しているが、実際にはスタイガーは77歳で亡くなっている。思い違いとしてスタイガーの前に言及するトニー・カーティス (Tony Curtis, 1925-) も42歳年下の6人目の妻を迎えており、現在82歳のカーティスの方が高齢種付けの例として適切だった可能性もある。
- ¹⁷ 1983年に英国で結成されて80年代に活躍したゲイ3人組の人気バンド「ブロンスキー・ビート」(Bronski Beat) のメンバーによく似た顔、というのが、少年による嫌がらせの台詞である。ゲイであるために家族から見捨てられた少年を歌った「スモールタウン・ボーイ」がこのバンドにとっては全英3位のヒット曲であり、事情聴取に当たった警官も、バンド名を聞いて「ゲイの男」とまっさきに反応している。バンド名はメンバーの一人スティーヴ・ブロンスキー (Steve Bronski) にちなむようだが、3人のうちの誰にこの赤ん坊が似ているのか、また本当に似ているのかは、分からない。
 なお、ドゥリー夫妻の夫の名前パトウ (Pato) は「同性愛者」をも意味し、マクドナの戯曲『リーナン村のミス・コン女王』の登場人物名と同一である。同性愛者の夫からは常識的には子どもは生まれないが、両刀使いや体外受精だった可能性もあり、その場合には赤ちゃんにも遺伝して、少年の言うように、ゲイの容貌の特徴を持つこともあながち考えられない訳ではない。
- ¹⁸ 原題は『六連発拳銃』であるが、実際には少年の右手の拳銃からは、充填なしで7発以上の銃弾が発射されていることがDVDスロー再生で確認できる。ドネリー氏が奪ったのはこの右手の銃であるから、すでに弾切れのはずであり、さらにまだ2発残っているという最後の場面での設定とは矛盾する。恐るべし、DVD。